

モブ令息に転生したボク。

可愛さと前世の知識で

悪役令息なお義兄さまを守りますっ！

セブラン

ジルベスターの父で、
クリストファーの母の再婚相手。
息子同様、誤解されやすい
性質だが家族を深く
愛している公爵。

アイクリッド

(一応)ジルベスターの
婚約者である第一王子。
ジルベスターとはお互いに
婚約の円満解消を
目指している。

ウエイン

騎士団長の息子で、
ちょっぴり脳筋な少年。
アイクリッドの腹心候補。
からっと陽気ないいお兄さん。

イクシス

宰相の息子で賢い少年。
アイクリッドの腹心候補。
甘いものが大好きで、
クリストファーとわかり合う。

ジルベスター

クライス公爵家の嫡男。
感情を表に出すことが不得意で
誤解されがちだったが、
クリストファーと出会って以来、
随分と感情豊かになった。

クリストファー

元伯爵家の子だが、母の再婚で
クライス公爵家の次男になった。
前世の記憶を持つ、
明るく元気な五歳児。
義兄のジルベスターが最推しだった。

◆プロローグ

なんてこと！

ボク、お母様の再婚でジルベスター様（八歳）の義弟になってた！

その日、ボクに運命の出会いが訪れた。

その方は階段の上から後光を背負ってボクの目の前に現れた。

窓から射す光に照らされた銀髪は、夜空に冴え冴えと輝く月のよう。大人の片手に収まりそうな小さな顔。そこにすうっと通った鼻梁、スッキリとした形のよい唇、静寂に満ちた夜を思わせる深い紺碧の瞳が絶妙なバランスで配置されている。

まるでお星様。闇夜に輝く一等星、スピカだ。

思わず口を開けて見惚れるボクに、お星様はその美しい目を細めてこう言った。

「君がクリストファーか？ 私は君の義兄になるジルベスター・クライスだ。これからは家族になるのだ、私のことはジルと呼んでくれ。君のことはクリスと呼んでもよいだろうか？」

ジルベスター・クライス！

ちよつと口は悪いけれど、そんな優しいリヨウのことが僕は好きだった。

それがおかしくなったのは、中学に上がるころ。リヨウはだんだん僕の友人関係に口出しするようになった。

「あんなヤツと遊ばないでよ。ゆうつてば、ちよつと優しくされただけですぐ騙されちゃうんだから。勉強だったら僕が教えてあげる。僕がいればいいでしょ？」

そう言つて、僕が他の誰かと遊んだり話をしたりすることを嫌がるようになった。そういう時のリヨウの顔は、僕が知る兄弟のような親友の顔とは違つて見えて、ちよつと怖かった。

リヨウは僕と二人でいたがつたけれど、僕はクラスメートとも仲良くしなかった。同じ小学校の子にはなぜか遠巻きにされるようになっていたから、中学に入つて色々な子が話しかけてくれるのが嬉しかったのだ。

だから僕はリヨウにこう言つた。

「リヨウは親友だけど、僕は他の人とも話したい。リヨウのことは親友だつて思つてる。でも、だからつて他の人と話しちゃダメだなんておかしいよ。みんないい人だよ？ だからリヨウも一緒に話そうよ。それならいいでしょう？」

リヨウは不満げに唇を尖らせ、それでも不承不承頷いてくれた。でもやつぱり僕が他の人と話したりすると、「ゆうは僕と一緒にいるべき。親友でしょ」と割り込んできた。

そんなリヨウの行動は徐々にエスカレートしていく。

ちよつとだけ「可愛いな」つて思つた女の子は、いつの間にかリヨウの彼女になっていた。

僕は彼女に「リヨウくんに付き纏うのはやめてよね！」と睨まれたあげく、その後しばらくして、今度は「アンタのせいでリヨウくんに振られたじゃない！」と罵られた。

僕には彼女が何を言っているのか分からなかった。心当たりなんて全くなかったから。

シヨックを受ける僕に、リヨウは笑つてこう言つた。

「ゆうが好きになる子がどんな子か興味があつたから付き合つてみただけ。なのにゆうに嫉妬するから別れたの。僕はあんな女よりゆうのほうが大事だもん」

その後もこれと同じことが何回もあった。

それでも、二人きりの時のリヨウは、過保護だけど面倒見のいい優しいリヨウのままだった。だから、僕はリヨウのことを突き放せずにいた。おかしいと感じつつ、そばに居続けたんだ。

高校に入ると、リヨウは、僕の知るリヨウではなくなった。

彼は学校で無邪気な優等生を演じ、明るくみんなを引っ張つていくリーダーとして先生や生徒の信頼を得た。その可愛らしい外見と頭脳を最大限に利用して、学校の人気者になった。

そうしながら陰で「ゆうには僕だけいればいいの。ゆうの友達は全部僕が奪つてあげる」「僕以外に笑いかけないで。ゆうは僕のものなのに、なんでそんなことをするの」と僕を罵るのだ。

そして、その言葉通り「ゆうが僕に裏で嫌がらせをする」「ゆうがカンニングしているのを見ちゃつた。どうしたらいい？」などと僕の友人に巧妙な嘘を吹き込み、僕から友人を奪つた。リヨウは人

気者の仮面の下で、学校中に僕の悪い噂をばらまき、僕を孤立させたんだ。

「僕がゆうを守るんだ」と言っていたリヨウはどこに行ってしまったんだろう。裏切られたっていう気持ちと、それなのに昔の楽しかったことを忘れられない悔しさと。とにかく苦しくて悲しくて辛くて。

「なんでこんな酷いことするんだよ!? 友達だと思ってたのに!」

そう詰め寄った僕に、リヨウは謝罪するどころかこう言って笑顔を見せた。

「ゆうは僕のものなんだから、他のヤツなんていらないでしょ?」

その暗い目に、ゾツと背筋が寒くなった。目の前にいるのは誰? 本当に幼馴染のリヨウ?

僕はもう、何を信じればいいのか、誰を信じればいいのか分からなくなってしまった。

結局、僕はリヨウから、全てから逃げたんだ。

人と会うのが怖くなってしまう僕は、両親にこれまでのことを打ち明け、「リヨウには絶対に会いたくない」って伝えた。そうして通っていた高校を辞めて通信制の高校に転校し、自分の部屋に引きこもるようになった。

リヨウがどうなったのかは知らない。電話もメールもラインもブロックしていたから。

お母さんもリヨウのお母さんに何か言ってくれたみたい。リヨウの家族は隣の家から引越していつて、そのまんま。

「ゆうに会わせて!」こんなはずじゃなかった!」と僕の家ドアを叩いて泣き喚く息子^{リヨウ}の姿に、リヨ

ウの両親も何か危険を感じたのかもしれない。

こうして始まった引きこもり生活。暇な時間を全てゲームに費やすだけの日々。

そんな時ネットで見かけたのが、人気のゲーム「ラブ☆レボ」だった。

「ラブ☆レボ」は性別関係なく攻略できる恋愛ゲームだ。徐々にストーリーが配信されていくタイプのオンラインゲームだったから、ゲームというよりもマルチエンディングのアニメというほうが近いのかもしれない。同性婚が可能な設定で主人公を男にも女にもできる仕様だったので、配信開始前から一部でかなり話題となっていた。

僕が「ラブ☆レボ」をやってみたのは、たまたま。キャラデザが僕の好きな絵師さんだっていう、ただそれだけの理由。

でも、ここで僕は運命の出会いをしたんだ。

それは、攻略対象アイク王子の婚約者にして幼馴染、ジルベスター・クライス様だ。

彼は本当にカッコよくって素敵で、僕の推しになった。

ジル様は容姿も含め何もかもがハイスベック。高位貴族の息子だから、地位も権力もある。

でも、僕がジルベスター様を推した理由は、その中身。

ジル様は全然威張らないのだ。シンプルイズベストみたいな言葉の割に、話す相手が高位貴族でも平民でも、男でも女でも、子供でも大人でも、態度も言葉も変わらないの。これってすごいこと

じゃない？

しかも、普段は無表情なのに、照れる時はよく見たら眉がへによつと垂れていたりする。可愛いが過ぎるでしょう！

要するに、クールな言動や容姿とその中身のギャップに、僕はすっかりハマってしまったのだ。

このゲームはステージごとに順を追って配信された。だから当初、悪役が誰なのかは明かされていなかった。

そのせいで、僕は当然のようにジル様も攻略対象だと思い込んでいた。

ところが、ゲーム後半になるにつれ、ジル様の扱いは不穏なものになっていった。

主人公のピンク頭が、なぜかジル様の目の前で転んだり階段から落ちたりと怪我をしまくって、それが全部ジル様がやったことなのだと噂になってしまったの。

そのせいで、ジル様は伶俐な美貌と無表情を「冷たい」「心が無い」と言われるようになり、みんなから距離を置かれてしまう。みんなこれまで「神秘的」だの「クールで素敵」だのとてもはやしていたくせに！ 手のひらくるくる返しすぎでしょう！

しかも婚約者であるアイクや、幼馴染であるアイクの側近イクシスもウエインも、その噂を信じてピンク頭を庇い「君には人の心が理解できないのか」とジル様を責めるようになった。

ジル様の味方はいなかった。みんなしてジル様がやったんだと決めつけ、ジル様に確認しようともしなかったの。

こうして僕の推しであるジル様は、いつのまにかゲームの悪役にされていた。

でもね、僕にはそんな攻略対象たちやピンク頭のほうが悪役に見えた。

僕はどうしても納得がいかなかった。

どうして彼がひどい目に遭わなければならないの？

確かにジル様は無表情でめったに笑わないから誤解されやすい。でもそれは不遇な生い立ちにより表情筋が死滅したせいで、ジル様のせいじゃない。本当はとても優しい方なのに。

ジル様はいつもアイクたちから一步下がった位置にいるけれど、その視線の先には、必ずアイクたちがいた。ジル様は口にしないだけでちゃんと三人のことを大切に思っている、僕にはそう見えた。それなのに三人は、ずっと一緒にいたジル様ではなくピンク頭のほうを信じたの。

エンディングで幼馴染たちによって断罪された時、ジル様は一瞬驚いたように口を開きかけた。でもアイクたちの表情を見て、ひとつだけ瞬きし、諦めたように口を閉じた。

あれって「そんなことはしていない」って言おうとしたんじゃないの？ でもみんなピンク頭の味方で、ジル様の話を聞く気なんてないんだって、それが分かって諦めたんだよ。「もう言っても無駄だ」って思ったんだよ、きっと。

どんなに辛かったことか。悲しかったことか。

僕もリョウに同じようなことをされたから、ジル様の気持ちはよく分かる。

自分を置き去りにして勝手に周りが動いていく。違うって言っても誰も信じてくれず、やっても

いないことをやったんだって決めつけられる。それって、とても心が折れるものなのだ。

ちゃんと見ていたら分かるはずなのに。ジル様は嫌がらせをするような人じゃないって。百歩譲って、もしもジル様が本当に嫌がらせをしたならば、そうする理由があるはずだ。その上で堂々と「私がしたことだ。こういう理由がありやったことなのだが、異論があるのならば聞こう」くらい言うよ、きつと。ジル様はそういう人でしょう？

そもそもジル様は筆頭公爵家の嫡子。嫌がらせなんてする必要がない。公爵家の力があれば、ピンク頭だって学園の生徒だって、自分で手を汚さずにどうとでもできるんだもん。

でもジル様は、誰に何を言われても「そう思われるのならば仕方あるまい」と答えて黙って立ち去るだけ。裏切った仲間を責めることも恨むこともしなかった。ただ黙って消えていった。

そんな彼が悪役令息？　ありえないでしょう！

周り中がピンク頭の味方で自分に冷たい目が注がれる中、ジル様は毅然と顔を上げ続けていた。自暴自棄になることもせず、どんな時も前を向き、背中を伸ばして立っていた。

そんなジル様を見て僕は確信した。やっぱりジル様は何も悪いことはしていないんだって。だって、もし後ろめたいことをしたのなら、あんなに凛と前を向き続けられるはずないもの。

僕は信じている。ジル様は嫌がらせなんてやっていないし、やるはずもない。

馬鹿みたいに実直に、清々しいほどあるがままを受け入れて、諦めた目をして、それでも自分は

自分だと顔を上げ続けた人。それが僕の見てきたジル様の姿。

汚名を着せられてもその高潔さを失わないジル様に、僕はどうしようもなく心を打たれた。泥中の蓮みたいだって思った。

ジル様は周りからどんなに悪意を向けられようと学園で孤立しようと、ただの一度も学園を休むことなく、最後まで顔を上げ続けていた。

僕と同じように四面楚歌の状況なのに、そこから逃げて引きこもりになった僕とは違い、ジル様は誰にも理解されなくてもたった一人でも、自分を曲げずにいた。

最後まで折れないその姿に、僕は光を見たんだ。

こうして僕は真のジル様推しになった。ジル様のことを考えるだけで幸せで、元気が出た。彼のように僕も頑張ろう、そう思えた。

僕は、溢れるジル様愛を抑え切れず「ラブ☆レポ」ファンの交流サイトに色々書き込みをするようになった。

そうこうするうちに、出会ったのが、僕と同じジル様推しのミノくん。

ネットで毎晩のように「ジル様のどこが好きか」「ジルベスター様がどんなに素晴らしいか」を熱く語り合ううちに、僕とミノくんはいつの間にか電話でプライベートなことまで話す仲になっていた。

「なあ、カフェでコラボするらしいぜ。一緒に行こう！」

彼の再三にわたるお誘いに応える形で、ついに僕は引きこもるのをやめ、ミノくんと一緒に出かけるようになった。ジル様とミノくんが、引きこもっている僕をまた外の世界に連れ出してくれたの。そして、気づけば僕は日常を取り戻し、笑えるようになっていた。

でも僕は、残念ながら、「イベントに行こう」ってミノくんと待ち合わせて、その集合場所の近くで事故に遭って死んじゃったっぽい。

ミノくんに見せるために持ってきた「ジル様のマル秘ビジュアル」を胸に抱いて、「ミノくん、これ見せたらどんな顔するかなー」ってにこにこしていたのが、最後の記憶。

なんだか間抜けな最期だけれど、僕らしいと言えば僕らしい。でしょう？ 最期としては、悪くなかったと思う。これは本当に。

※※※※※※※※※※

前世の僕の家族もミノくんも、あまり悲しまないでいてくれたらいいな。

だってボク、今最高に幸せなんだから！

最推しのジルベスター様と一緒にいるんだよ？ 信じられる!?

ミノくんに会いたいなあ。「僕、ジル様の弟になったよ！」って言ったら、なんて言ってくれるだろう。

こほん。話がそれちゃった。

色々語ったけど、要はこういうこと。

僕はジル様に、前を向く勇氣とそのきっかけを貰ったのだ。ジル様のおかげで僕には親友ができた。そして、笑顔も外の世界も取り戻せた。

だからね、つまるところジル様は僕の恩人。僕の最推しであり、唯一絶対神なの！

その最推しが、今ボクの目の前にいる。ボクを義弟と認め、好意的な笑みまで向けてくれている。

ああ、ボク、もう死んでもいい！ いや、むしろ死んで今天国にいたりする？

とにかくとにかく、僕の最推しがボクのお義兄様！ 今のボクならお義兄様をお救いできるかも！

前世の僕の唯一の心残り、それはジル様を「悪役」という立場からお救いできなかったこと。

ゲームでのジル様に対する扱いがあまりにも理不尽に思えた僕は、こう考えていた。

仮にピンク頭が嘘を言っていないのだとすれば、ジル様はどこかでその飾らぬ言動をピンク頭に誤解されていたんじゃないかって。攻略対象やピンク頭との最初のボタンの掛け違い、そこさえなんとかすれば、ジル様が本当はお優しい方なのだと理解してもらえるのでは？

ジル様が幸せになるエンディングがどこかにきつとあるはず。なければおかしい。むしろあるべき。そう思った僕は、ジル様を救うべく裏ルートを探してあらゆる選択肢を試し、攻略本や設定集を網羅しまくった。電子の海を泳ぎ、希望のかけらを探した。

でも見つからなかった。

何をしてもしル様をお救いできず、悔しさに歯噛みする日々。

一人ぼっちの彼の横に寄り添ってあげたかった。その背中をそっと撫でてあげたかった。僕はあなたが好きです、あなたを信じています、つてジル様に伝えたかった。

だからね、神様がそんな僕の願いを叶えてくれたんだと思う。

ボクはきっとジル様を守るために「ラブ☆レボ」の世界に生まれたの。

先述の通り、ボクのお義兄様はゲームの中では悪役令息ボジ。

この世界がゲームと同じなら、今から八年後、お義兄様が貴族学園の高等部に入学した年に主人公が登場し、お義兄様の不遇が始まる。そしてその三年後、高等部を卒業する時に主人公たちによって婚約破棄の上に断罪^罪されてしまうのだ！

裏切り者アイクとの婚約がなくなるのはいいとして、地位も名誉も奪われて田舎^{いなか}の領地に送られてしまうなんて、そんなのダメ！絶対に許せない！

じゃあ、どうしたらお義兄様をお救いできるだろう。

まだ現れてもいないピンク頭を「嘘つき」「腹黒あざと系」だと決めつけるのは早計。だって一応主人公だしね。

だから、あの断罪は「ジル様の無表情ぶりにより、あらゆる行動が裏目に出て誤解された結果」、つまりところ「ゲームの強制力」という名のお約束のせいだと仮定して行動するのがいいかもしれない。

ボクが誤解の大元となったジル様の無表情をなんとかして「誤解が生まれない状況」を作れば、断罪は回避できるんじゃないかな？

ついでにジル様の素晴らしさや分かりにくい優しさや可愛らしさを周囲にあまねく知らしめておけば、ジル様は嫌がらせなどしない清廉な方だと、みんなに理解してもらえるのでは？

ゲームのジル様は救えなかったけれど、この世界のジル様は違う。だってボクがここにいるんだもの！ボクがいるからには、絶対にお義兄様を断罪させたりなんかしない！お義兄様の素晴らしさをみんなに布教し、お義兄様を守ってみせる！ボクがジル様信者を増やすのだ！

というわけで、まず着手すべきはお義兄様の笑顔を取り戻すこと。ボクがなんとかお義兄様の表情筋^{よがえ}を蘇らせ、みんなにお義兄様の尊い笑顔を「見て見て」しまくりましょう！

次に、攻略対象をボクが先に攻略しちゃうの！自慢ではないけれど、客観的に見てボクは可愛い。モブなのに可愛いのだ。今はまだ子供だからこそ、あざと可愛さを武器にできるはず。それでボクがピンク頭よりも先に攻略対象と仲良しになって、お義兄様のよさをアピールするの。

そうやって予め^{あらかじめ}周りを味方につけておけば、万が一お義兄様の悪評が流れても、誰も悪評なんて信じずにお義兄様の味方をしてくれるでしょう？

題して「ジル様断罪回避計画」！

大好きなボクの推し、ジル様。しがないモブではありますが、ボクがあなたをお守りいたします！

◆クリス、伯爵家から公爵家へ

ボク、クリストファーはグリフェウス伯爵家の嫡男として生まれた。

入り婿として伯爵家に入ったお父様は、二年前、ボクが三歳の時に他界した。だからボクにはお父様がいない。

こう言うど、「かわいそうに」だとか「寂しいだろう」って同情されるかもしれないけれど、実はボクにはお父様の記憶はあまりないの。それはボクがとても幼かったせいもあるけど、実際のところ共に過ごした時間自体があまりなかったから。お父様はお城に勤める文官でとても忙しく、長期休み以外のほとんどを、ボクのいる領地ではなく王都のタウンハウスで過ごしていたから。

お父様が他界してからは、お母様の弟であるサイラス叔父様が、当主代理兼、ボクの父親代わりとなって、色々なことを教えてくれた。サイラス叔父様はとても優しく、本当のお父様のようにボクを可愛がってくれる。ボクはそんな叔父様が大好き！

そういうわけで、お父様がいなくても特に寂しさを感じることもなく、幸せに育ってきた。このまま三人での幸せな日常が、ずっと続くものだと思いますくらいに。

だから、お母様と叔父様に「大事な話がある」と言われた時には、その話の内容がまさかこんなことだなんて、夢にも思わなかった。

「え？ お母様が、再婚？ 結婚するの？」

「ええ。そういうお話をいただいているの。お母様もそうなればいいなと思っているわ。お相手は公爵様なの。公爵様には治めなければならない領地があるし、たくさん領民を守らなければならぬのよ。だから公爵様に伯爵家に入っていたくことは難しいの。でも、伯爵家にはサイラス叔父様がいますから、私たちがいなくても大丈夫でしょう？ だからもしクリスが再婚を許してくれるのなら、お母様たちが公爵家に入ることになるわ。つまりクリスと一緒に公爵家に行くことになるの。どう思う？」

どう、って……そんなこといきなり言われても困るし、よく分からない。

「えと、えと、伯爵家だって大丈夫じゃないです。ボクとお母様が行っちゃったら、叔父様が一人になるもの！ そんなのって寂しいでしょう？ ボクも叔父様がいないと寂しいですし……」

言ってるうちにもう寂しくなってきた、急いでぎゅうっと叔父様に抱きついた。

叔父様は「おっと！」と言って、飛びついたボクを難なく受け止め、そのままいつもするようにボクを抱き上げてコッソンとおでこを合わせた。これは大事なお話の合図。こうされたらちゃんとお話を聞くと約束。

「心配してくれてありがとう、クリス。でも私は大丈夫だ。だって会おうと思えばいつでも会えるんだから。そうだろう？ お母様とクリスは、公爵家で今よりもっと幸せになるんだよ。クリスにもお父様ができるんだぞ？ 嬉しくないかい？」

「えっとね、お母様とサイラス叔父様が結婚して、叔父様がボクのお父様になってくれたらいいと

思う。そうしたらお父様ができますし、三人ですつと幸せに暮らせるでしょう？」

いい考えだと思っただけれど、お母様も叔父様も困惑顔。

叔父様は困った時の癖でポリポリと頬を掻き、両眉を下げた。

「うーん。私はクリスのことを息子のように愛している。でも、お母様と私は血が繋がっているから、結婚はできないんだ」

がーん、とショックを受けたボクの頬を、お母様が優しく撫でた。

「叔父様には叔父様の幸せがあるのよ、クリス。叔父様もそのうち素敵な奥さんを貰って、クリスのように可愛い子供が生まれるわ。ね？ だから叔父様は大丈夫。クリスはまだ幼いでしょう？ クリスにはお父様が必要だわ。お母様が結婚したら、公爵様がクリスのお父様になってくださるのよ。素敵でしょう？」

「ボクはサイラス叔父様がいればいいです。叔父様だってボクを息子みたいって……」

「そうねえ……じゃあ、お兄様は？ クリスはお兄様がいるお友達のことを羨ましがっていたでしょう？ 実はね、公爵様にはクリスより三つ歳上の息子さんがいるの。今八歳なんですって。クリスにもお兄様ができるのよ？ どう？ 嬉しくない？」

「お兄様！ ボクにお兄様ができるのですか？ ボクの、ボクだけのお兄様？」

そう、一人っ子のボクは「お兄様」という存在に憧れていた。

幼馴染のラファエルのお兄様、ミカエルは、ラファを迎えにきた時たまにボクとも遊んでくれる。木登りをする時にはボクを上まで引つ張り上げてくれて、ボクが庭で転んだ時なんて、おんぶして

屋敷まで走ってくれた。ボクは優しくてカッコいいミカ兄様が大好きなのだ。

でも、ミカ兄様はボクのお兄様になってはくれない。ミカ兄様はラファのお兄様だから。

「バイバイ」の時に手を繋いで帰る二人を、いつもボクは羨ましいような寂しいような気持ちで見送っていた。

そんなボクに本当のお兄様ができるだなんて、なんだか夢みたい。想像しただけでワクワクする。

ボクは俄然^{がぜん}乗り気になった。

でも、急に意見を変えるのはなんだか現金で恥ずかしい気がして、なんとなく手を握ったり開いたりしながら、お母様に聞く。

「えつとね。お母様は公爵様と結婚したいのですか？ 公爵様のこと、好き？」

「そうね、好きよ。クリスが許してくれるのなら結婚したいわ。でもお母様はクリスが一番大切なの。だからあなたがどうしても嫌だと言うのならやめてもいいのよ？」

でもお母様は公爵様が好きなんでしょう？ それなのにボクのために我慢するだなんて、そんなのはダメ。ボクだってお母様が大切なもの。お母様に笑顔でいてほしい。

ボクは心を決めた。

「あのね、ボクもお母様が大切な。だからね、お兄様ができるなら結婚してもいいです。サイラス叔父様といられないのは悲しいけれど、叔父様にも叔父様の家族ができるんでしょう？ だったら寂しくないよね？ それに、ボクとはいつでも会えるんでしょう？ 叔父様、ボクがここを出てもボクに会ってきますか？」

なんてなりたくないもの。

ほっと胸を撫で下ろすボク。そんなボクの肩を優しく撫で、お母様は話を続けた。

「あのね、クリス。これまで公爵様をあなたに会わせていなかったでしょう？ そのことをおかし
いとは思わなかった？」

「えっと……ちよつとだけ思いました。でも、公爵様は偉い方なんでしょう？ お仕事が忙しいの
かな、って思っていたんだけど、違うのですか？」

もしかして、公爵様がボクに会いたがらなかったとか？ だとしたらどうしたらいいの？ 今さ
らだけ心配になってきた。

「もちろんお忙しいせいもあるのだけれど……実は、公爵様は何度もあなたに会おうとしてくだ
さっていたの。でもお母様がそれをお断りして、その代わりに結婚前に一緒に暮らす『お試し家族』
をしたいとお願いしたのよ」

「どうして？ いきなり一緒に暮らすほうが大変じゃないですか？」

普通一緒に住むのは「まずはお会いしてから」だと思う。そう思うボクのほうがおかしいのかな？
大人の事情はよく分からない。

困惑するボクの手を、お母様が両手でそつと包むようにして膝の上で握り込んだ。

「それはね、ありのままの二人を見てほしかったからなの。とても誤解されやすい方々だから。一
緒に暮らす中で、あなたに二人の本当の気持ちを見つけてほしかったの。そうしてあなたが二人
と仲良くなれそうだと思ってくれたのなら、結婚するわ。公爵様もそれでいいと仰おじやつたから。一緒

に暮らしてみても、それでもあなたが嫌だと言うのなら、結婚するのをやめてまた伯爵家に戻しまし
う。それでいいかしら？」

ええ？ つまり、お母様が結婚するかどうかはボクの決断にかかっているって、そういうこと！
もう決定かと思っていたから、びつくり。一緒に暮らした相手に「嫌です。家族になるのは無理で
す」って言うなんて、それって意地悪じゃない？

とにかく、公爵様たちのお顔が動かないということは分かった。意地悪な先代様のせいなんだよ
ね。公爵様たちはなんにも悪くないと思う。むしろかわいそう。

「えっと。それって、ちよつと会っただけだと怖い方だつて誤解しちゃうかもだけれど、一緒にい
たら優しい方だつて分かりますよ、っていう意味ですか？ お会いた時に怖い顔をしていても、
ホントは優しいのよつていうことなの？」

「うふふ。さすがクリス！ そう、そういうことなの」

ポンと手を叩いてお母様が同意した。

「大丈夫！ ボク、いいところ探しは得意なもの！ それに、お母様を好きになつてくれた方なんだ
から、それだけでボク、お二人のことが好きですし。だけど……お二人はボクのことを好きになつ
てくれるでしょうか？ 嫌つて言われたらどうしましう？」

どちらかといえばそちらのほうが心配。ボクはお義兄様ができて嬉しいのだけれど、お義兄様の
ほうは弟なんて欲しくもないかもしれないでしょう？ ボクのことを好きになつてくれなかったらど
うでしょう？

うーん、と眉尻を下げて考えるボク。そうしたらボクだけ伯爵家に戻してもらう？
するとお母様は当たり前のような顔でボクの心配を笑い飛ばした。

「あら、クリスなのよ？　こんないい子を好きにならないはずがないでしょう？」

そう言われると不思議と大丈夫な気がしてきた。実際、ボクは誰かに嫌われたことはなかったりする。ちよつと自慢。まだ優しい人にしか会ったことがないからかもしれないけれど、一応、外見は可愛いと言われるし、性格だって悪くはないはず……たぶん。……うん、大丈夫！

お義父様とお義兄様、ボクのことを好きになってくれたらいいな。もしダメでも、なんとか好きになつてもらえるように頑張る！　任せて、お母様！

※※※※※※※※※※

パッカパッカと馬車を走らせ向かった公爵邸は、郊外にある伯爵家の屋敷から馬車で五時間くらいのところにあつた。

王都の貴族街に屋敷を持つのは、基本的には高位貴族。高位貴族になればなるほど、王都での社交が多い。だからほとんどの高位貴族は、領地の屋敷であるカントリーハウスとは別に、王都にもタウンハウスを持っている。夫人や子供はカントリーハウスで当主はタウンハウスに、っていう貴族もいれば、カントリーハウスに領主代理を置いて一家全員タウンハウスに、っていう貴族もいる。それでね、そのタウンハウスなんだけれど、そもそも王都は人口の割に土地が狭いから、カント

リーハウスほどの大きさではないのが一般的。

なのに、王都のクライス公爵邸は……規格外だった。タウンハウスなのに大きい！

なんと門番さんが二人もいるし、門から続くお屋敷までのアプローチもすごい。森みたいな場所がずっと続いていて、向こう側が見えないの。

まだ貴族教育は少しだけしか受けていないボクにだって分かる。タウンハウスの大きさは、そのまんま貴族の力を示す。つまりこれは、公爵様がすごおく力のある貴族だっていうこと！

確かにお母様の言うように「公爵様たちが伯爵家に入るのは無理」だって、妙に納得してしまった。門を守っている門番さんも、なんだかとてもビシッとしていた。ボクたちが公爵家の馬車に乗っていたからか「ようこそおいでくださいました！」と敬礼してくれる。指の先までピーンと揃っていて、最高にカッコいい！　お揃いの制服も素敵！　さすが公爵家だ。

色々聞かれることもなく「どうぞ」とそのまま通してくれたので、大急ぎで初めましてのご挨拶。「ボク、これからお世話になります、クリストファーです。よろしくお願いします」

馬車の中からだつたけど、ちゃんと聞こえたみたい。後ろの窓からバイバイと手を振ったら、ニコニコしながら手を振り返してくれた。優しそうな門番さんでよかった！　仲良くなれそう！

門から続くアプローチは、思っていたよりもとずっと森だった。なんと、小さな池まであったの！　思わず「ここ、王都ですよね!?」と御者さん（おしやさん）に確認しちゃったくらい森っぷり。タウンハウスというよりも、いつそこが領地なのでは？

森の中をまっすぐ十分ほど馬車で走ると、ようやく広場が見えてきた。馬車留めのあるエントラ

ンスだ。その中央では、大きな噴水がサアサアと美しい放物線を描いている。噴水を丸く取り囲むように花壇があり、そこをぐるりと回って玄関に向かうようになっていた。

「お待たせしました。到着いたしました」

重力なんてないみたいに静かに馬車が停まって、御者^{ぎよしや}さんが素早く台を置いてボクを馬車から降ろしてくれた。

「さあ、お足元にお気をつけくださいね」

「ありがとうございます」

ぴよんと馬車から降り、改めてお屋敷を見る。

「ふ、ふわああ！」

すっごおーく大きい！ 建っているというより、聳^{そび}えているという言葉のほうがしっくりくる。

見上げたらちゃんと後ろに倒れそう。気後^{きおく}れたボクは、無意識にお母様の服の裾を掴んでしまった。

「お、お母様、ボク、ほんとにこのおうちの子になるの!? 大丈夫ですか?」

お母様は、ぶるぶる震えるボクを見て「あらあら！」と笑った。

「お母様も最初は驚いたわ。でもね、クリスならすぐに慣れるわよ、大丈夫。敷地内のお池で釣りをしたり、森でお散歩したりできるのよ? どう? 楽しそうでしょう?」

それは楽しそうだけれども!

タウンハウスなのに敷地に森があるんだよ!? しかもおうちはお城みたいだし! 「お母様のオマケ」なボクがいてもいいところ? お邪魔虫すぎない?

「あの、あの、やつぱりボク、叔父様と伯爵家に残……」

言いかけたところで、玄関前に立っていた五十歳くらいの灰色の髪の男の人がスツとこちらにやってきた。すらりとした長身で、片眼鏡をかけている。頭がよさそう。

この人が公爵様? と思ったけれど、違ったみたい。

その人はボクたちの手前まで来るとピタリと足を止め、胸元に片手を当て九十度に腰を折った。

「奥様、おぼっちゃま、ようこそ公爵邸へ」

どうやら公爵様ではなく使用人さん。柔らかな物腰だけれど、一つ一つの所作が流れるように美しい。さすがは公爵家!

「ありがとうございます。どうかお顔を上げてちょうだい? 息子のクリストファーよ。これからは親子でお世話になるわね。よろしく」

顔を上げてくれたジェームズさんが、ボクを見てニコツと頬を緩めた。

「ようやくお会いできましたね。大変嬉しく思います。お初にお目にかかります、クライス公爵家で家令を務めさせていただいております、ジェームズと申します。何かございましたらお気軽にわたくしにお申し付けください」

家令さんだったのか! どうりで!

「ボクはクリストファーです。クリスと呼んでください。どうぞよろしく願います」

「ふふふ。ご丁寧に痛み入ります。クリス様、わたくしは使用人でございますから、敬語を使わなくてもよろしいですよ? どうか楽になさってください。何かお聞きになりたいことはございま

すか？」

優しく言ってくれているけれど、「高位貴族は使用人さんには敬語を使わない」っていうことだよね。でもボク、年齢が上の人には丁寧に話したい。公爵家に入るのなら、直したほうがいいのかな？「えと、その、ボクは年上の方にはこの話し方が落ち着くのです。これがボクの普通なので、このままでもよろしいでしょうか？」

首を傾げて最初の質問を見ると、ジェームズさんが優しく目を細めて微笑んだ。

「よく聞いてくださいました。ご無理をされているのでなければ、クリスマス様のよろしいようになさってください。ここがこれからクリスマス様のおうちになるのですから。他に何かご心配はございませんか？」

ボクが話しやすいように、わざわざボクの前にしゃがんで聞いてくれるジェームズさん。とても親切な方のようにほっとした。

実はボクには気になっていたことがあった。伯爵家では使用人さんと親しくすることが許されていた。けど家格が上の公爵家ではダメなのかな？　どうなんだろう？

ボクは、この機会に思い切って聞いてみることにした。

「ボクはまだ子供です。ですから、大人の方や仲良くなりたい方にはどなたに対しても丁寧に接したいと思います。それと、できれば使用人のみなさんともたくさんお話したいし、仲良くしていただきたいのですが……それは公爵家にはふさわしくない行いだったりしますか？　公爵様や使用人のみなさんのご迷惑になりますでしょうか？」

なるべく礼儀正しく頑張つて伝えてみる。するとお母様もボクを援護してくれた。

「ごめんなさいね、ジェームズ。伯爵家ではみなで家族のように過ごしていたものだから……厨房にもぐり込んだり馬の世話をしたりと、この子も自由に行っていたの。公爵様さえよろしければ、この子の気の済むようにさせてやりたいのだけれど……」

ジェームズさんの目が見開かれた。顎に手を当て「ふうむ」と考えている。

「失礼いたしました。クリスマス様は公爵家としてのご自分のお立場に配慮してご質問くださったのですね。ありがとうございます。そのお心遣い、このジェームズ確かに受け取りました」

ボクと視線を合わせ、胸に手を当てて恭しく頷くジェームズさん。

「そうですね……では、この公爵家では、ご自由にお話しになってください。皆も喜ぶと思いますよ？　公爵様にはわたくしから報告させていただく、ということでしょうか？　ただし、わたくしや使用人の名前だけは呼び捨てでお願いいたします。わたくしも皆もそのほうが落ち着くのです。お願いできますか？」

わあ！　本当に？

「はい！　ありがとうございます、それでお願いします、ジェームズさ……ジェームズ！」
「ふふふ。どういたしまして」

スツと立ち上がったジェームズが、ボクたちに先立って扉を開けてくれる。

「では、中にご案内いたします。ご主人様がお待ちです」

いよいよ公爵様との初対面だ！ お母様は公爵様のことを「怖いお顔なの」って言っていたけれど、いったいどんな方なんだろう？ どれくらい怖いお顔？ 公爵様の本当の気持ち、ボク、ちゃんと見つけることができるかな？

色々と心配になってちよつと入るのを躊躇^{ちゅうちよ}してしまったボク。

そんなボクを安心させるように、お母様がそつとボクの背に手を当てて優しく促す。

「入りましょうか、クリス」

「うん」

扉を潜^{くぐ}つたとたん、ボクは口をアングリと開けてしまった。目に飛び込んできたものがすごすぎたの。

わあ！ 玄関ホールが三階までの吹き抜けになってる！ 天井がすつごく高い！ しかも、細かなレリーフまで描かれているみたい。正面にある二階に続く階段も、幅が五メートルくらいありそう。とにかく何もかもが大きい！

伯爵家もそれなりに広いほうだったけれど、その何倍もありそう。王都のタウンハウスなのに！

「……ふわあ……」

ここ、ダンスホールだったりする？ 玄関ホールだよね？

無意識にぎゅつと上着の胸元を握りしめてしまっていたみたい。お母様の手がそつとボクの指に触れ、「皺^{しわ}になってしまっわよ？」と服の代わりにお母様の指を握らせてくれた。

と、二階の踊り場に人影が。その影は、ゆつくりとボクたちのほうに向かって降りてきた。

「クライス公爵様です」

囁^{ささや}いたジェームズが、公爵様に向かって深々と腰を折る。

「ご主人様、クリスティーナ様とクリストファー様がご到着なさいました」

お母様がスツとカーテシーをしたので、ボクも慌てて片足を上げて膝を曲げ、礼を取った。

コツン、コツンと近づく足音が、ボクたちの数歩先でピタリと止まった。

「クライス公爵家当主、セブラン・クライスだ。よく来てくれた。顔を上げて楽にしてくれ」

ちよつと緊張したような、硬質な声音。でも一生懸命優しく話しかけてくれようとしている。

「ありがとうございます、公爵様。お待たせして申し訳ございません。息子のクリストファーです」

「失礼いたします」

恐る恐る顔を上げたボクの目に飛び込んできたのは、銀の髪の毛の美しい男の人だった。

お母様よりも五つ年上って聞いていたから、確か三十歳のはず。なのに皺一つない若々しいお顔。まるで神様が作った彫像のように整った容貌は、ともすれば冷たそうに見える。でも、柔らかく細められた灰色に近いブルグレイの瞳には、ボクに対する気遣いがあった。

あ！ 礼装を身に纏^{まと}つてくれている！ ボクたちを迎えるためにわざわざ着替えて待っていてくれたの？ 偉い人なの？

ほら、もう見つけた。公爵様の優しいところ。

目が合ったから「にこつ」としてみたら、狼狽^{うろた}えたように一瞬だけパチリと瞬きし、それからすかに目じりと口元を緩ませた。

うん。ボクこの方、好きかも。お母様の言う通りだ。確かに表情には出にくいけれど、よく見たらちゃんと分かったよ。

楽にしたいと言ってくれたから、普通のご挨拶でいいよね？

「お初にお目にかかります、クリストファーと申します。お会いできて嬉しいです。どうぞよろしくお願いいたします」

ペコリ！

しっかりと頭を下げてからまた公爵様を見上げたら、公爵様は嬉しいような困ったようなお顔で一言「うむ！」と頷いてくれた。

ボク、分かつちゃった！ □元がピクピクしていらつしやるから、これはきつと笑顔だ！

「君の母上からは、君がとてもいい子だと聞いている。私も君に会えたことを嬉しく思う」
本当？ やったあ！ ボクも嬉しいです！

えへへ。嬉しさが溢れて、思わず横に立つお母様のお腹にぐりぐりと顔をこすりつける。

「まあまあ。甘えん坊さんねえ」

お母様、ボク、公爵様と仲良くなれそう！ でも、同じおうちに住むのに、これから家族になるのに「公爵様」って呼ぶのはおかしいよね？ うーん……

「えっと、ボクのことはクリスとお呼びください。公爵様のことは……えっとお……あのお……お、お義父様ってお呼びしてもよろしいでしゅか？」

思い切って聞いてみたら、囁んだ！ ああ……穴があつたら入りたい……しゅんぼり。

そうしたら公爵様の眉尻がひよいと上がって□元がムズムズ。あれ？ お耳、少し赤い？ もしかして照れていらつしやる？

じいっとお顔を見つめたら、慌てたみたいに□元を隠されてしまった。

「……ク、クリスがいいのならばぜひお願いしたい」

それはイエス？ イエスですよ！ やったあ！

うふふ。やつぱり照れていたんだ。お義父様ったら、なんだか可愛いつ！

「ボクは『お義父様』って呼びたいです。なので、お義父様って呼ばせていただきますね。えへへ。なんだかちよつとだけ恥ずかしくて照れてしまいますね。でも嬉しいですよ！」

「うふふ。よかったわね、クリス。公爵様、ありがとうございます」

「クリスティーナ、いや、ティーナ。どうか私のことはセブランと呼んでくれ。……私たちは家族になるのだから」

「まあ！ ありがとうございます。セブラン様。どうぞよろしくお願いいたしますね」

あー！ お義父様とお母様ったら、二人で照れ照れしてる！ とつても仲良しだ。

それはとてもいいことだと思うのだけれど……お義兄様はどちらに？

お義父様とのご挨拶はできたのに、お義兄様とはまだご挨拶できていない。お義父様の後ろにいらつしやるみたいなんだけれど、ちょうどお義父様の陰になってしまつてよく見えないの。

「えっとお……お、お義兄様にご挨拶したいのですが……」

「ああ、そうだな。ジルベスター、こちらに」

お義父様が振り返った、その先にいたのは……お義父様と同じ銀の髪の美しい人だった。

「君がクリストファーか？ 私は君の義兄になるジルベスター・クライスだ。これからは家族になるのだ、私のことはジルと呼んでくれ。君のことはクリスと呼んでもよいだろうか？」

◆ボクの推し、ジルベスター様！

「ジルベスター・クライス！

ピッシャーン！

「う、う、うそでしょおっ!?」

五歳のボクの脳裏に、怒濤どとうのように前世の、正確に言えばゲームのジルベスター様関連の記憶が蘇った。

思い出したのは、リヨウという幼馴染がいたこと。その幼馴染にいじめられて悲しかったこと。引きこもりになったこと。ジル様と出会って救われたこと。あとはひたすら「ラブ☆レボ」のジル様の知識とゲームの知識。そしてその関連で出会ったミノくんについて。

要するに、ジル様に向かう僕の気持ちの根幹に関わることだけ思い出したの！

あまりにもピンポイントすぎる思い出仕方だね。うん、ボクもそう思う。前世の僕ってば、どれだけジル様が好きだったの!? 気持ちに分かるけれども！

時間にしては二、三分くらいだったと思う。ボクの頭の中ではあらゆる前世の情報が渦を巻いていた。

膨大な記憶を一気に受け入れたせいで「カチコーン」と固まったボク。

出会った早々、様子がおかしくなったボクに、ジル様が遠慮がちに声をかけてくれる。

「君……大丈夫か？ どうかしたのか？」

ハッ！

意識を取り戻したとたん、かあつと頭に血が上るのぼ。

前世の推しがボクの目の前にいて、ボクのことを心配してくれてるっ！

「ひゃ、ひゃいっ！ だ、大丈夫でしゅっ！」

はわわ！ そういえばまだご挨拶もしていないっ！ なんてことっ！

大慌てでガバリと九十度のお辞儀。なんならいっそ五体投地してもいい！

「あ、改めてご挨拶もうしあげまふっ！ ボ、ボクはっクリストファーともうしましゅ！ クリスとお呼びください！ あ、あの！ ジル兄様とお呼びしてもよろしいでしょおかつ！」

嘸みまぐったけれどもこれは仕方なし！ 「よろしく願いまーっす！」とばかりにお辞儀の姿勢のままジル様に向かって手を突き出す。あ、あくしゅ！ 握手してくださいませえっ！

「あ、ああ」

ボクの勢いに圧おされたジル様は、目をパチクリしながらゆっくりと階段を降り、ボクの前に来て

くれた。なんてお優しいっ！

若干引きつつも「よろしく頼む、クリス」と、ボクの手を握ってくれるお義兄様。

ああ、推しのファンサ！ 白魚しろいさのような指先の冷たく滑らかな感触、これが推しの……！！

感動のあまり、ボクは最推しに触れた自分の手をぎゅっと胸元で抱きしめた。あ、涙まで……

「……ボク、もう一生手を洗いませんっ！」

「いや、洗いなさい！ 本当に君はどうしたのだ？ 大丈夫なのか!？」

はわわ！ またボクの心配を！

ああ、神様、ありがとうございます、ありがとうございます!! ボクが転生したのはジル兄様と出会うためだったのですね。これまで同じ世界に推しがいるなど露つゆほども思わずのほんと生きてきて申し訳ございません。ようやくボクの使命を思い出しましたっ。

手をぎゅうっとしたまま天を仰ぎ、八百万やおよろずの神に感謝を捧げるボク。

一方、ボクの突然の奇行に周りのみんなは哑然茫然。

そ、そうだよ。驚かせてしまつてごめんなさい。あまりのことに自分を抑え切れなくて……

そんな中、気を取り直したお母様が、なんとか場を取り繕くづおうと言葉をひねり出した。

「……こ、この子ったら、ずっと『お兄様』に憧れておりましたの。『お兄様』にお会いするのを楽しみにしていたものですから……とても嬉しいのね、クリス。うふふふ」

広いホールにお母様の乾いた笑いがむなしく響く。

でもさすがは優しさの塊かたまり、公爵家のみなさん。全力でお母様のフオローに乗っかってくれた。

「そ、そうか……う、うむ！ そ、それはよかった！」

「わ、私もクリスのような義弟が出来て喜ばしく思う」

お義父様もジル兄様も優しい！

やっぱりジルベスター様は悪役なんかじゃない。とつても優しい人だ！ それなのに、ゲームでは悪役扱いされ、断罪されてしまったのだ。そうに違いない！

きつとボクは、そんな最推しを守るためにこの世界に來たのだ。そうに違いない！

そう、ボクがここにいるからにはジル様を断罪なんてさせないっ！

「ジル兄様っ！ ボク、ボク、絶対にジル兄様をお守りいたしますからねっ！ ご安心くださいっ」拳を握つて天に突き上げ雄々しく宣言するボクに気圧されたように、お義兄様が数歩後ろに下がった。目が微かに大きくなっている。

あ、これはびつくりの顔？ 表情筋の大半が死んでいるみたいだけれど、よく見たらちゃんと気持ち分かる。お義父様と一緒に。

つまり、感情はしっかりある。それを無意識に自制してしまつて、うまく表に出せないだけなのだ。俄然勢いづいたボクは、ぐぐつとお義兄様に身を寄せた。

「お義兄様の表情筋はボクが蘇よみがえらせますっ！ それと、もしも誰かに嫌がらせをされたりいじめられたりしたら、ボクに言ってください。絶対ですよ！ 悪い人は全てボクがやっつけますから！ 意地悪な人とかも！」

フンスフンスと鼻息も荒く胸を叩き、あるかなしかの力こぶをムキツとさせると、ジル兄様の両

方の眉尻がクイっと上がって、慌てた様子で口元を手で覆った。

あ、これさっきお義父様もやってたやつだ。

「ふ……っ、んん……ふふ……っ、コホン……」
え……？

「ふは……っ……ふふふ、んっ……」

なんとか抑えようとしているみたいだけれど、抑え切れぬ声が漏れている。こ、これはもしかして……推しが、ボクの推し「氷の令息」が笑って……!?

ゲームの中だけではなくリアルでもレアだったようで、ボクはもちろんお義父様やジェームズ、お母様まで目を見開いて驚愕の表情でジル兄様を凝視^{ぎょうし}。

「ジ、ジルベスター（様）が……笑った……!？」

「まあ！」

そんなボクたちにおかまいなし。お義兄様は、一度笑い出したら止まらなくなるタイプだったらしい。

「ふは！ ク、クリスは……とても、可愛いのだな？ ふ、ふふ。私を……この私を……っ君が守ってくれるのか？ い、意地……ふっふふ……こほん、意地悪な人から？ ふふふ」

笑いを堪^{こら}えずぎて、ついに目の端に涙まで浮かべたジル兄様。目元をぬぐいながらもまだ笑い続けている。鋭い毗^{まじり}がゆるりと緩み、お口のはじっがかすかに上向きに。

これが推しの笑顔！ まだ硬いけれども、ちゃんと笑顔だ！ 尊い！

でも、何がそんなにおかしかったのだろう。ボクの力こぶがまだ小さすぎた？ マッスルは今後に期待してほしい。これから頑張つて鍛えるから！ 筋肉はなくとも、気持ちの強さでは誰にも負けないつもり。だからせめて力いっぱい断言した。

「はい！ もしいるのならば、ジル兄様を陥^{おとし}れようとする意地悪な人とか！ 嘘つきとか！」

「……意地悪……っ……嘘つき……っ」

口元を覆ったまま俯き、ふるふると震え出したジル兄様。それはどういう震え？

お義父様とお母様は、なぜかスツとボクから目をそらした。もしかして、力のないボクには無理だと思つていたりするのだろうか。推しを守るためならなんだってできるのに！

憤慨^{ふんがい}しながらも「お任せを！」と手を挙げてボクの決意を見せたら、ジル兄様がエヘン、オホンとまた咳をした。

あれ？ なんだかお会いたし時よりも少し顔が赤くなっているように見える。

これ……もしかして風邪？ さっきの震えは寒さ？ ボクお義兄様に無理をさせてしまったの？

「だ、大丈夫ですか？ 寒いですか？ 喉が痛いとかですか？ ハチミツを舐めるとよいそうです。ジェームズにお願いしますか？ お熱とかありませんか？」

慌ててぴょんぴょんと顔を覗き込んだら、「大丈夫」とようやくお顔を隠していた手をどけ、また麗^{うるわ}しきご尊顔を見せてくれた。

「うん、すまない。少し驚いただけだ。もう大丈夫だ。ところで、先ほどの話なのだが……クリスが私を守ってくれるのか？ 私が君を、ではなく？」

言いながらひょいっとボクを抱き上げるジル兄様。

ほわわ！ まさかの推しの抱っこっ！ なんてこと！

ボクは飛び跳ねる心臓を宥めながらジル兄様の体温と匂いを最大限に摂取し、記憶にしっかりと留めるべく笑顔をガン見しつつ、力強く首を縦に振った。最初が肝心だものね。

「はい！ いろんなことがあろうと！」

両手でそっとジル兄様のお顔を包み、その美しい星を宿した瞳に誓う。

「ボクが必ずジル兄様をお守りします。だってボクはそのためにここに来たのだから！」

するとお義兄様の瞳がかすかに揺らいだ。どうしたの？ なんだか……寂しそう。どうして？

「……私と君は出会ったばかりだ。なのに何ゆえ私をそこまで？ 私のことを知らぬゆえ、そのように言うのだ。私を知れば君も……」

言いかけたのを遮る。だってその声にはなんだか否定的な響きがあったから、最後まで言わせたらダメだと思つて。

「もちろん知っております！ ジル兄様は優しくて強くて、最高にカッコよくて素晴らしい方です！ あ、でも、弱くてもカッコ悪くてもいいのですけれど。だってボク、ジル兄様がジル兄様であるだけで大好きなので！」

「弱くとも、カッコ悪くとも？ ……表情がなくとも？」

繰り返すお義兄様の声は少し震えていた。強張った笑顔。

何が怖いのか？ ボクはあなたの痛みを、悲しみを全部なくしたい。だから、ボクを信じてほしい。

ボクを側に置いてほしい。それだけなの。

「はい。お義兄様がお義兄様である限り。ボクはどんなお義兄様でも大好きです。あと表情はありますよ？ よおく見たらちゃんと分かりますし！」

すると、ジル兄様のお顔がほわりとほどけた。まるで蕾が花開くようにふんわりと。さっきまでの寂しさは微塵も残っていない、見た人全てが幸せになるようなそんな笑顔。

「うむ……そう、なのか。クリス、ありがとう。出会ったばかりでおかしなことをと思うかもしれないが、私もクリスを……その、好ましく思う。義弟となってくれたことを心から嬉しく思っている君を歓迎しよう」

大切なものにするようにそっと優しく抱きしめられたあげく、愛おしげに頬を撫でられ、きらめく瞳で至近距離で見つめられたボクは……「ふわあ……」と、か弱い叫び声を上げて気を失った。

「クリス!？」

「クリス、どうしたの!？」

「と、とりあえず、サロンへ！ ソファに寝かせよう！」

お義兄様の腕の中で急にぐったりしたボクに、お義兄様もお母様もお義父様もびっくり。使用人さんたちも慌てたようにバタバタと動き回っている。

ご、ごめんなさい、大丈夫です……推しの供給が過多すぎたの……

これがボクとジル兄様との出会い。ボクが自分の使命に気づき、氷の令息の氷が解け出した瞬間

だった。

※※※※※※※※※※

供給過多で目を回したただけだから、ボクは割とすぐに目を覚ました。

でも……ど、ど、ど、どうしよう！ 大変なことになっている！

ソファに寝かされているみたいなんだけれど、なんと、推しがボクの頭をその膝にのせ、ボクの手を握ってくれていた！ これはいわゆる膝枕！

あまりのことに、戻った意識をもう一度失いそうになった。

でも「ジェームズ、早急に医者を呼べと言っただろう！ まだ来ぬのか？」だの、「クリスには持病でもあるのか？ ならば薬は……っ」だの、「持病などないはずなのに、どうしたのかしら……」だのと大騒ぎする声が聞こえたので、これはいかんと根性で目を開けた。

だってお医者様なんて呼べたら恥ずか死ぬ！ 太急ぎで連れてこられたお医者様の前で「推しの供給過多です」なんて言わなくてはならないなんて、無理っ！ オタクはチキンハートなので！ 「待ってえ！ 待ってくださいっ！ ボク、起きましたっ！ 大丈夫ですからあっ！」

目をパチッと開けるやいなや叫んだボクに、驚いたジル兄様が「うわっ！」とのけぞった。

えへへ。推しの「うわっ」いただきましたー！

って、そんな場合じゃない。すっごくご心配をおかけしていたようで、一斉にみんながボクのと

ころに集まってきた。

「クリス！ よかった！」

お義兄様がボクをムギュッ。お母様はもちろん、腕の中でいきなりボクにぐったりされてしまったお義兄様のご心配は相当だったもよう。青ざめた顔には冷汗まで浮かんでいる。

「……ご心配をおかけしてごめんなさい」

しょんぼりと謝罪すると、お母様がボクの髪をそっとかき上げ、顔色チェック。

「クリス、とても心配したのよ？ まさか倒れるなんて……いったいどうしたの？ 大丈夫？ ど

こか痛いとか苦しいとかはない？」

「大丈夫。どこも痛くないし、苦しくありません」

だから心配しないで、と言ったのだけれど、それでもお母様は納得しない。

「だって気を失っていたのよ？ なんでもないはずないでしょう？ あら、少しお顔が赤い気がするわ。お熱でも出てしまったのかしら？」

するとすかさずジル兄様がボクの額に手を当てた。ひえ！

かあああ、つと二気に体温が上がってしまったボクに、ジル兄様がその形のよい眉を顰める。

「確かに少し熱い気がするな。顔も赤い。もしやクリスは身体が弱いのですか？ どうりで身体が小さいと……」

ああ、お義兄様、ボクの身体は健康そのものですっ。小さいのは伸びしろなのでっ。

心の声もむなしく、口を挟む隙すらなく「クリスは病弱」という方向に話が纏まっていく。

「氣を遣わせ無理をさせてしまったのかもしれませんが。ジェームズ、毛布を持ってきてくれ。それと熱さましの薬湯を頼む！ 医者を早く連れてくるのだ！」

「ジルベスター、早馬を出そう。それと、ゆっくり休めるようクリスはベッドに寝かせたほうがよいのではないか？ 私が運ぼう」

「いえ、父上、クリスは私が」

テキパキと指示を出すジル兄様とお義父様。

ああ、ち、違うんですう！ ボクは生まれつきとっても丈夫！ 風邪だってめったに引きません。

これは熱じゃなくって、萌えなんですからう！

もう恥を忍んで言うしかない。これ以上の惨事になる前に！

「ごめんなさい！ 本当に大丈夫なんですっ！ あの、あの、えっと、嬉しすぎて頭がボワンってなっちゃっただけですのっ！ ジル兄様があんまりにも素敵すぎて、カッコすぎたので！ 嬉しいがボクの許容量を超えてしまっただけなのですっ！」

ピタリと皆が動きを止めた。

しーん。

泣きそう。こんな初対面になろうとは……ボクの馬鹿っ！

無の表情になったお義父様が、重々しく口を開く。

「……ジェームズ、一旦医師は保留だ」

「はい。馬は差し止めました」

「そうか。では……クリス、確認させてくれ。特に気分や身体の不調はない、ということだよいな？ もう大丈夫なのか？」

「はい。今はもう元気いっぱいです。あの……単に興奮しすぎただけですのっ……」

「……つまり……ジルベスターとの対面に興奮しすぎたゆえ、頭に血が上り氣を失った、ということだよいのだろうか？」

推しの前で言葉にされてしまうなんて、なんて辱め？ はずかし これってば、公開処刑……

「……仰おしやる通りです。ジル兄様の笑顔があまりにも素敵で、素敵の供給過多で……」

「……素敵のキョウキュウカタ……？」

だってあの笑顔！ あの抱擁ほうようだって、反則すぎでしょう！ 守りたい、推しの笑顔！

ちらりと見えたお母様が、呆れ返った顔をしている。きつと後からサイラス叔父様とかに「クリスったらね、初顔合わせで……」とか告げ口されるやつだ。うう……！

ジル兄様のお顔？ とても見る勇氣はない。

だって初対面からこんな……！ まるでタチの悪いキモヲタみたいでしょう？ 恥はずかしかしい義弟

でごめんなさい、ジル兄様……

下を向いて心の中でひたすら詫びていると、そつと頬に手を添えられた。そのまま優しく促すようにして、伏せた顔を上に向けられる。

「は？ ふえ？ あ、あの、あの、ジル兄様……？」

そこには、真剣な表情でボクの顔を見つめるジル兄様が。

あああ！ そんなに見つめられたら、また……

ふうっと気が遠くなる寸前、ジル兄様が「はぁーっ」と大きく息を吐いた。そしてそのままボクの上にぐったりと顔を伏せてしまう。

「……ジ、ジル兄様!？」

「……よかった。急に……一体どうしたのかと……」

ボクのお腹に腕を回してぎゅっと抱きしめるお義兄様。

「……心配をかけてしまつてごめんなさい、ジル兄様。ボクは大丈夫です」

感動で声が震えてしまった。

そつと手を伸ばし、僕の胸に伏せたお義兄様の頭を撫でる。

この人が冷酷？ そんなはずない。だって会つたばかりのボクのことをこんなに心配してくれるような人だよ？ ボクの頭をお膝にのせ、手を握ってくれていた、そんな人なんだよ？

ボクがジルベスター様を推したのは、間違いないじゃなかった。ジル兄様は、断罪されていい人じゃない。冷酷な人だとか心がないなんて言われていい人じゃない。

ボクは、お義兄様のこういう優しい顔を、繊細な心を、もっとたくさんの人に知ってほしい。

「あのね、会つたばかりなのですが、ボクはジル兄様が本当に本当に大好きなのです。信じてくださいね？」

ふるり。

手のひらの下のジル兄様が小さく震えた。怖がりのウサギさんみたいに。

「……そのようだな」

そつと撫でていたら……え？ 震えがだんだん大きくなってきてない？

「頭に血が上り気を失つてしまうくらいに、な？ ふっ……ふふ」

へ？ は？ 笑ってる？ ウソでしょ!？」

「……もしかして、ジル兄様、笑っていませんか？」

「……笑つてなど……おらぬ。ふ、ふふっ……うむ」

ウソだ！ 絶対に笑つてる！ ボク、真剣に言つたのにい！ ぶう！

むくりと身体を起こしたジル兄様が、むくれるボクの頬を優しくつつく。

「本当に笑つてなどいない。だからそう怒るな、クリス」

そう言つてボクを膝の上に抱き上げて目を覗き込んでくるお義兄様に、きゅーんと胸が苦しくなつた。そのお顔、ずるいつ!! そんなに愛おしそうな目で……

「ほんとのことなのに……」

「ああ。分かつている。……これでも、とても嬉しく思っているのだ。言葉にできぬほどにな。すまぬ。初めてできた弟があまりにも可愛かつたものでな、つい。この兄を許してくれるだろうか？」

「……ならいいです。あの……ボクの初めてできたお義兄様もあまりにもカッコいいです。大好き」抱つこのまま、ぎゅっとお義兄様の首に抱きついた。

「ふ。そうか。ならばよい」

ポンポンとボクの背を叩くその手がとても優しく、うっとりしていると……